

大通公園を望む窓辺から

児童公園

常任理事 笹本 洋一

我が家の前に児童公園がある。2段式で、そこそこの広さがある。夏休みにラジオ体操の会場となるので、近所の子どもたちにはなじみがあるのだろう。いつも誰かが遊んでいる。わざわざ車に乗って来る方もいるようで、親子で遊ぶ姿も見られる。

今年、公園の改修工事があった。ブランコ、滑り台、砂場、水飲み場のすべてを新しいものに更新した。

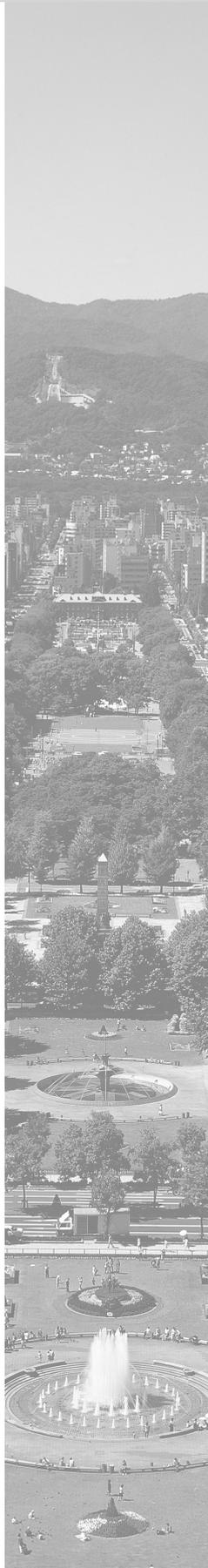
公園は大きさなどによって分類されるようだ。今は児童公園と呼ばず、街区公園と呼ぶようである。街区公園の標準規模は0.25haだそうだ。少し大きいのは近隣公園と呼び、規模は2ha。さらに大きいのは地区公園で4ha、もっと大きな公園は、広域公園で50ha以上を指すそうだ。これらをまとめて都市公園と呼び、「都市公園法」に基づく概念である。

私の住む札幌市の公園は、札幌オリンピックや政令指定都市になるときに整備された小規模なものが多く、老朽化してきている。そこで、公園施設の長寿命化を目的に、公園の機能分担を図ることになった。規模の大きい公園(0.1ha以上)は核となり、遊具等のレクリエーション機能を主体に、狭小公園(0.1ha未満)は高齢者も考慮し遊具等を撤去のうえ、休憩や広場などに公園機能を絞った整備を行うことになった。

目の前の公園は0.1haにちょっと足りないが、付近に大きい公園が無いこと、2段式で遊具置き場と広場とが区別されていることから、遊具が残されたのだろう。

子どもは減っている。私が生まれた1959年の日本の出生数は、1,626,088人だった。2016年は初めて出生数が100万人を割り、最少の976,979人であった。一番多かった年は、1949年の2,696,638人であった。

我が家の前の公園に子どもたちが集まるのは、他に行き場がないためかもしれない。これも時代の流れだろうか。少子化の姿は、こんなところにも現れていた。



就活は介護施設へ

監事 藤瀬 幸保

最近の就活条件は①東京勤務②企業の偏差値③生涯年収だそうである。しかし条件をクリアした大企業でも過労死じゃあ困りますよね。介護施設の現場は3K①きつい②汚い③給料安いといわれているしなあ。それでも介護施設は樋口氏の言う女性の職場進出を阻む3大ネック①出産・育児②転勤③親の介護などもクリアできる可能性大ですよ。

厚労省は介護報酬改定で、自立支援部分は引き上げるが全体では下げると言う。いやあ在宅支援と言っても家族の負担が増えるのは明らかですよ。介護界は家族の介護負担を減らすように努力してきたんですよ。介護保険の目的は①社会的孤立感の解消②心身機能の維持③家族の身体的・精神的負担の軽減ですよ。高齢者は要介護度が下がるといった目に見える形での改善は難しいけど、老人が落ち着いて暮らし、家族の負担が軽くなり、暮らしの質が上がるといった取り組みへの配慮は必要なんじゃないの。また介護度の改善が見込めない認知症の人は、事業者が受け入れを選別することにならないか心配だよ。

一方現代ではうつや精神不安、社会的不適応の人が増加しているが、そうなる前に介護の現場を覗いてみたらどうですかね。「命より金」という価値観の対極にある世界が見えますよ。

介護の場に住む人は波乱万丈の人生を歩んできた方々です。宗旨も違うし感性も違う、貧富の差もどんとある。あらゆる違いがあっても一つの地域・施設で、幸せを維持していくためにはお互いの寛容が必要です。そこに暮らしている人は、人生を歩んできた方々の結果です。介護をしてみたら、老人から元気と勇気と希望を受け取れるかもしれませんよ。そしてその気持ちこそが大切なんじゃないの。これからの時代は寛容と受容の時代なのではと思いますよ。来たれ介護界へ。